

宙を拓くタスクフォース(第8回)
議事要旨

1. 日時 令和元年 5 月 30 日(木)13:30～15:00

2. 場所 総務省 10 階 総務省第1会議室

3. 出席者

(1) 構成員

中須賀主査、荒井構成員、石川構成員、今井構成員、小笠原構成員、押田構成員、片岡構成員、川原構成員、蔵本氏(岡島構成員の代理)、志佐構成員、森信構成員、矢野構成員、渡辺氏(河合構成員の代理)、渡辺構成員

(2) オブザーバ

内閣府宇宙開発戦略推進事務局

経済産業省製造産業局航空機武器宇宙産業課宇宙産業室

文部科学省研究開発局宇宙開発利用課宇宙利用推進室

株式会社 NTT データ経営研究所

株式会社三菱総合研究所

(3) 総務省

國重大臣政務官、吉田国際戦略局長、泉官房審議官、藤野総務課長、

坂中技術政策課長、村上宇宙通信政策課長、西室衛星開発推進官、笠井局付

4. 議事要旨

(1) 提出された意見に関する宙を拓くタスクフォースの考え方について

事務局から資料に基づいて説明が行われた。構成員等からの主な意見は以下のとおり。

○報告書p.28 の 20 行目の「暴露」は「曝露」の誤植。

(2) その他

構成員から本タスクフォースの閉会にあたり、総務省や宇宙産業への期待、本タスクフォースの感想が述べられた。主な意見は以下のとおり。

○渡辺構成員

宇宙玩具開発の担当者として、玩具を通じて子供に宇宙を訴求できればと考えている。

○渡辺氏(河合構成員の代理)

5Gの時代をこれから迎えるが、災害時のバックホール等、衛星通信は一段と重要な役割を果たす。5Gと衛星は補完関係にある。宇宙は夢のある分野であるため今後も積極的に関わっていききたい。

○矢野構成員

報告書第3章で宇宙産業について幅広く捉えており、本タスクフォースの意気込みが伝わってくる。今後研究開発で貢献するためには、若手の人材が必要であり、幼い頃から宇宙に関心を持ってもらうことが重要。幅広い方々に広めるためのコミュニティを総務省でも作っていくべき。

○中須賀主査

幼い頃から宇宙に慣れ親しんでもらうことは大切。

○森信構成員

衛星通信は遠距離通信程度のユースケースしか考えていなかったが、宇宙クラウドや宇宙間での通信など、本タスクフォースをきっかけとして社内でも様々な議論が進んだ。引き続き弊社でも盛り上げていきたい。

○志佐構成員

本タスクフォースを通して、社内でも目の前の課題解決だけでなく、将来像を見据えた課題解決を行うきっかけとなった。今後も、通信を重要なインフラと捉え、地上と変わらず宇宙でも普通に使える未来にするため、具体的に検討していきたい。

○蔵本氏(岡田構成員の代理)

宇宙ベンチャーとしては、人・もの・金がやはり大切である。米国の様に政府が資金面でサポートするスキームができれば宇宙産業が飛躍的に成長する。また、コンテストについては、他省と横並びにせず、総務省として切り分けをはっきりしたものを行ったほうが、参加者としてはありがたい。

○川原構成員

今の大学生はデータを活用して価値を生み出していくことに関心を持っている。宇宙データの活用は最大のチャンスであり、これが上手に活用されれば産業にもなるはず。

データ活用という視点でコミュニティを作っていければと思う。

○中須賀主査

10のトライアルで1成功すると言っても、1成功するには10のトライアルが必要。トライアルを次々に行える環境が必要。

○片岡構成員

メディアとしては、一般的な関心を高めるためには、宇宙を通じてスターを作るのも重要。また、ベンチャーは短期ベースでの資金投資を欲している。同時に人材育成の観点では、Established Space にいた人がベンチャーに転職し、知見を生かしている。新しい企業の応援もお願いしたい。

○小笠原構成員

日本人は場さえあれば、産業を越えて議論をするのが得意だと感じている。産学官合わせたディスカッションの場を引き続き持つとよい。また、報告書にある通り HTS の高度化・容量化は当然であるが、一方で少し性能が落ちてもいいから安く、早く打ち上げたいというニーズもある。高度化と合わせて、通信技術のジェネリック化も検討して欲しい。

○中須賀主査

超小型衛星は大型衛星からすればジェネリック的なものではないか。

○押田構成員

One web 投資や、HAPS 等で宇宙の可能性を感じている。また、技術的な部分の他に、制度面の後押しが欲しい。特に資金の問題は共通の問題であるのでアンカーテナンシー等の検討を進めて頂きたい。

○今井構成員

宇宙に関わるプレイヤーが変化してきたことで、今までアイデアベースだったものが現実のものとなりつつある。JAXA も自らアイデア実現のための限界を決めつけてしまえば、まさしく Old Space へ転落してしまう。取り組むべき課題は多く、着実に課題解決を進めていきたい。

○石川構成員

社内でも本タスクフォースにならって、2030～2050 年を構想してバックキャストしながら、建設会社として貢献出来ることを考えている。また、コミュニティ作りの際は、新たな人材を加え続けて欲しい。市場規模予測と同様に、宇宙に関わる人材も増えていかな

ければならない。若い人が宇宙に関心を持ちやすいような環境を考えて欲しい。

○荒井構成員

宇宙に関する文化をつくっていくことが大切。報告書では、一般的な世帯における教養娯楽費の10%が宇宙に消費される内掛けの発想だったが、宇宙はプラスオンで伸びる産業だと思う。また、日本の持つソフトコンテンツを取り入れて宇宙分野を盛り上げることも重要。

○中須賀主査

宇宙の持つ夢やロマンを元に、エンターテインメント的な要素を上手く使ってコミュニティを続けていくこと、関係者を増やしたり資金調達をすることも今後必要。そして、報告書を出して終了とするのではなく、構成員のそれぞれが活動を続けることが大切。

(3)その他

事務局より、今回の意見を踏まえた報告書(案)の修正については、中須賀主査に一任することで承認された。

以上